

2021年11月28日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

ゼカリヤ書 9：9～10

ルカによる福音書 19：28～40

「王が来られる」

<王の到来>

今日からアドベント、待降節に入ります。これから毎週、クランツに一本ずつ火を灯しながら、イエスさまがお生まれになったクリスマスを迎える準備をします。

「アドベント」という言葉は、「到来」という意味です。これはまず、神の御子イエスさまが、わたしたちの世に来て下さった「到来」を意味します。それはクリスマスの出来事であり、その日まで、祈りつつ心をこめて準備するのが、アドベントの期間です。

そしてもう一つ。わたしたちは、この世に来られ、十字架と復活の御業を成し遂げ、天に上げられたイエスさまが約束なさったこと。世の終わりの日に、イエスさまが再び「到来」されることを待ち望んでいます。アドベントは、この第二の到来、つまり、イエスさまが再び来られる日を待ち望む信仰を、新たにされる時でもあるのです。

そのようなアドベントに入ったのですが、今日の聖書の御言葉は、受難週の始まりの出来事が記されている箇所です。時期が全く違うように思います。しかし、それはちょうど、イエスさまがエルサレムに入って来られる、という場面であり、まさに、「到来」を覚えるアドベントにふさわしい箇所とも言えるでしょう。

イエスさまは、救いの御業を成し遂げるために、弟子たちと共に、エルサレムに向かってずっと旅を続けておられました。そしてとうとう、エルサレムに入るところまでやって来られたのです。そして、この一週間後、イエスさまは十字架に架けられるのです。

ルカによる福音書は、特にイエスさまがエルサレムに入られるまでのところで、「イエスさまが来られる」ということについて、様々な仕方で語ってきました。そして、あなたは、来られたイエスさまがどのようなお方であると信じるか。このお方を、あなたはどのように受け入れ、お迎えするか、ということを問うてきました。

そして、今日のところでいよいよ、このイエスさまがどのようなお方か、エルサレムで、何を実現するために来られた方かが、はっきりと示されるのです。

<来たるべき王>

さて、今日のところは大きく二つの場面に分けても良いと思います。

一つは、28～36節です。エルサレムに入るにあたって、イエスさまが二人の弟子たちを遣わし、子ろばを用意させました。そして、子ろばに乗ったイエスさまを、人々が自分の服を道に敷いて、お迎えしたという場面。

二つ目は、イエスさまがエルサレムへそのようにして入って行かれる道中で、弟子たちの群れが賛美の声をあげた、という場面です。

これらのエルサレムに入る時の出来事は、イエスさまが、旧約聖書の時代に神さまが預言者を通して語ってこられた「来たるべき王」であるということ。そして、それが「どのような王」であるかということ、をはっきり示しているのです。

①子ろば

[言われたとおりに]

まず、28 節で「イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。」とあります。「先に立って進み」。決然とした意志をもって、イエスさまはすべての人の救いのために、罪の贖いのために、十字架の死へと向かって行かれます。

そこで、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもと、これは後で「オリーブ山」と呼ばれていますが、そのふもとにあるベトファゲとベタニアに近付いたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、こう言われた、とあります。

「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」

弟子たちが行ってみると、イエスさまが言われたとおりでした。つまり、村へ入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが見つないであったのです。

この、イエスさまが「言われたとおりであった」というのは、とても大切な言葉です。

ここでは、ただ本当に言われたとおりに子ろばがいた、ということが実現しただけかも知れません。しかし、実はこの子ろばこそ、旧約聖書の神さまの御言葉が、言われたとおりであったことを示すものであり、またイエスさまがどなたであるか、どのような方であるかを、示すものとなるのです。

[子ろば]

さて、「子ろば」というのは、旧約聖書のゼカリヤ書に語られていましたように、神さまのご支配を実現する「まことの王」の乗り物とされています。

ゼカリヤ書 9:9 にはこうありました。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。／雌ろばの子であるろばに乗って。」

通常、王様は自分の強さを誇示するために、立派な軍馬に跨ります。それは武力の象徴であり、強さのしるしです。地上の王は、戦いによって国々を制圧し、力によって人々を支配するからです。

しかし、神のご支配は、そうではありません。ゼカリヤ書 9:10 にはこうあります。

「わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国

の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ。」

ここでは、はっきり、戦車と軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれる、と語られています。聖書が語る、来たるべき王は、平和を告げる王です。そしてそれは、武力によって勝利を収め、国々を制圧するような仕方ではありませぬ。

9節にはこうありました。「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る」。

「彼は、神に従い、勝利を与えられた者。」つまり、この来たるべき王は、神さまに従って歩むことによって、神さまから勝利を与えられ、平和をもたらし、まことの王、支配者となられるお方なのです。それゆえに、高ぶることのないお方です。高ぶることのない、というのは、他に「柔和」と訳されることもあります。

そして、だれも乗せたことのない子ろばに乗って来られる。早く走ることもできず、のろのろ、よろよろと歩くことしか出来ない、小さな子ろば。それに乗るといのは、威厳や強さを誇示するのは正反対で、むしろ、みっともなく、貧弱に見え、滑稽ですらあるかも知れません。

しかし、この平和の王に、軍馬は必要ないのです。子ろばで良いのです。この方は、柔和で、高ぶらず、神さまに従順に従われることによって、すべての勝利し、すべてを支配し、諸国に平和を告げて下さる、まことの平和の王だからです。子ろばとは、まさのこの「平和の王」の象徴なのです。この子ろばを、今、イエスさまは弟子たちに準備させ、ご自分がその平和の王として、乗ろうとしておられるのです。

[子ろばの主]

さて、遣わされた二人の弟子が、つながれた子ろばをほどこしていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどこのか」と言いました。これも、イエスさまが言われたとおりでした。弟子たちは、イエスさまに教えられたとおりに答えました。「主がお入り用なのです。」

この「主がお入り用なのです」という文章は、色々な訳の仕方があるようです。この聖書の訳ですと、主が、これを、つまりこの子ろばを、必要としているのです、という意味です。でも一方では、これの主が、この子ろばの持ち主である主が、お入り用なのです、という訳し方も出来ます。そして実はこちらの方が、直訳に近いと考えられるのです。

でも、そうだとしたら、不思議な話です。ここに、実際の子ろばの持ち主たちが登場しているのです。普段エサをやって育てている、子ろばの所有者です。ですから当然、弟子たちが自分たちの子ろばをほどこうとするのに戸惑い、声をかけました。

でも、イエスさまは弟子たちに言わせたのです。「この子ろばの、本当の持ち主である主が、この子ろばを必要とされているのです」と。

この子ろばにこそ乗るべき方。この子ろばに本来乗るべき方である主が、この子ろばのま

ことの主が、今、この子ろばを用いると言っておられる。イエスさまは弟子たちに、そのように告げさせたのです。それはここで、ご自分こそ、聖書に告げられた、子ろばに乗って来る王である、と宣言なさっていると言っても良いでしょう。そしてまさに、イエスさまが子ろばに乗ってエルサレムに入られることによって、ゼカリヤ書の御言葉は実現するのです。この方において、平和が実現するのです。言われたとおりに、なるのです。

イエスさまは、「平和の王」として来られ、エルサレムへ入られます。そして、神さまの御心に従順に従って、十字架の苦しみと死への道を歩まれます。そして、父なる神さまは、このイエスさまを死者の中から復活させ、すべての勝利をお与えになるのです。

イエスさまは、神さまに敵対する者、背く者、罪を犯す者を、蹴散らし、責め滅ぼすために来られたのではありません。神さまの御心は、これらの者たちが悔い改めること、「立ち帰ること」を求めておられます。人が、神と共に生きることを、望んでおられます。

そのために、神の御子イエスさまは、この神さまに背く、すべての人の罪を、ご自分の命によって贖い、罪の赦しを与えるために来られたのです。罪人にご自分の命を与えるために、このまことの王は来られたのです。

この王がもたらして下さる「平和」とは、ただ争いが止むこと、戦争がないということではありません。すべての人間にとって、まことの、本当の平和とは、神さまとの良い関係に生かされる、ということなのです。

人は神さまから離れ、背いた罪によって、神さまとの関係を一方的に壊してしまいました。そんなわたしたちの罪を、神さまが赦して下さり、和解して下さること。それが、わたしたちにとっての「まことの平和」なのです。

しかし、わたしたちは神さまに罪を赦していただけるようなものを、全く何も持っていません。それほどに、わたしたちの罪は深刻なのです。

しかし、神さまはわたしたちを赦したいと願って下さいました。わたしたちを受け入れ、共に生きることを望んで下さいました。そのために、神さまは御自分の独り子であるイエスさまを、わたしたちに遣わして下さいました。わたしたちに平和をもたらすために、イエスさまは子ろばに乗って、十字架が待っているエルサレムへ、来られたのです。

②王として迎える

[弟子の群れ]

そして、今日の場面で、イエスさまをまことの来たるべき王としてエルサレムへ迎え入れたのは、37節にあるように、これまでイエスさまに従って来た「弟子の群れ」でした。

「イエスがオリブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。」

弟子の群れは、「自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び」、神を賛美した、とあります。つまり彼らは、これまでイエスさまの教えや御業を目撃してきた者たちなのです。イエスさま

に従ってきた「弟子」と呼ばれる人たち。それは使徒として選ばれた十二人だけではなく、他にも多くの者たちがおりました。

ここに、エルサレム入りの記事における、ルカによる福音書の特徴があります。

他の福音書においては、イエスさまの弟子たちと共に、エルサレムに来ていた他の巡礼者たちも一緒になって、「ホサナ、ホサナ」と言ってイエスさまを迎えた、と書かれています。

しかしルカ福音書は、ここまでに、イエスさまに従う者はどのような者であるか、神の国に入るのはどのような者か、ということに重点を置いて語ってきました。

それは、ただ神さまの御力に依り頼み、信頼し、与えられる御言葉を、神さまから一方的に与えられる恵みを、ただ受け取ることしか出来ない者です。

そして、まさにここで、そのように恵みをイエスさまから与えられ、受け取って来た者たちが、イエスさまをまことの王として、迎え入れている。この平和の王の許でこそ、喜び、賛美の声を上げる者とされている。そして、その賛美の歌を通して、弟子たちはこの方こそまことの王であると、証ししているのです。

[王に]

弟子の群れの賛美は、38節に語られているとおりで。「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。」これは、詩編 118:26 からの引用とされています。それは、「祝福あれ、主の御名によって来る人に」という歌です。

しかし、ルカはここに「王に」と付け加えて、「王に、祝福があるように」としました。

ルカは、まさにイエスさまこそが、この「弟子の群れ」の王であること。この従う者たちの上に、まことに神の国のご支配が実現しているということ。そして、このように神を賛美する群れこそが、イエスさまが王であることの証人なのだ、ということ、示したかったのではないのでしょうか。

弟子の群れは続けて賛美します。「天には平和、いと高きところには栄光。」

これは聞き覚えがないでしょうか？そうです。イエスさまがお生まれになったクリスマスの時に、天使が羊飼いに告げられた、その時の天の軍勢の賛美の歌です。

「天には平和」。神さまが実現なさる平和が、実現し、完成する。神に栄光あれ。

この時、地上にあって、イエスさまに従う弟子たちが、神の国に生きる者たちが、天使の賛美を歌う者とされているのです。

[真実の証]

ところがここに、ずっとイエスさまに敵対してきたファリサイ派の人々が出て来ます。39節「すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、『先生、お弟子たちを叱ってください』と言った。」

これは、神さまの御名によって、誰かを勝手に王として崇めることは、神さまに対する冒瀆になるからです。だから、そんなことは止めさせろ、と言った。あるいは、イエスさまに

対して、あなたも弟子たちにこんなことを言われては迷惑でしょう？という思いもあったかも知れません。

ファリサイ派の人々は、これまでイエスさまに反発し、論争をしかけ、また敵対心を抱いてきました。イエスさまの奇跡の御業を目撃しても、教えを聞いても、御言葉の実現を目の当たりにしても。彼らは自分たちの正しさに固執し、イエスさまに従おうとせず、王として受け入れようとはしませんでした。

イエスさまはそんなファリサイ派の人に答えられました。「言うておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す。」

つまり、もしこの弟子たちが黙らされたとしても、弟子たちが歌っていることは真実であるから、それは必ず明らかにされる、ということです。

神さまの御業は、必ず実現する。イエスさまは、まことに王として来られ、平和を実現し、神のご支配をもたらされる。それは確かな真実なのです。

だからこのことは、弟子たちが黙ったとしても、必ず明らかにされ証される。石でさえも叫んで証しする。弟子たちが歌っているのは、そのように、覆い隠すことの出来ない真実なのだ。だから彼らを叱って、黙らせることは出来ない。イエスさまは、そう言われたのです。

しかし、また、わたしたちは知っています。この一週間の中に、イエスさまをまことの王として迎え、真実を語った弟子たちが、イエスさまを見捨て、賛美をやめ、黙ってしまったということ。そしてイエスさまは、そうなってしまうことも、ご存じであったに違いありません。

それでもイエスさまは、このエルサレムに入る時の、弟子たちの賛美の歌を、良しとしておられたのです。こんな心許ない弟子の群れの賛美であっても、イエスさまは、それが御自分の真実を証しするものであると、言い切って下さったのです。

それは、この弟子たちの罪もまた、イエスさまご自身が背負い、ご自身の命によって贖い、彼らを再び神さまの御許に立ち帰らせ、和解を与え、まことの平和に与らせて下さるからです。イエスさまご自身こそが、真実な方であり、すべてはイエスさまご自身が、実現して下さることだからです。

<王として迎え、賛美する群れ>

こうして、イエスさまはエルサレムへ入って来られます。まことの王として、平和の王として来られます。高ぶらない、柔和な王です。子ろばに乗って来られる王です。この方は、十字架に架かって死に、人の罪の赦しのためにご自分の命を与え、神さまとの和解に、まことの平和に招いて下さる、救い主なる王です。

クリスマスに、無力な、弱い、小さい乳飲み子となり、貧しく、惨めな飼い葉桶に寝かされた神の御子は、このように、子ろばに乗って、十字架へと向かわれたのです。

これだけ低くなられた神の御子のみ前に、わたしたちはどのように進み出れば良いのでし

ようか。わたしのために血を流された十字架の前で、この方が差し出して下さったご自分の命を、神さまとの平和への道を、わたしたちはどのように受け取ればよいのでしょうか。

わたしたちが差し出せるものは、何もありません。わたしたちはただ、神さまを悲しませ、イエスさまが死ななければならなかったほどの、自分の罪を悔い改めること。そして、まさに乳飲み子のように、与えられた赦しを、ただ受け取ることしか出来ないのです。

しかし、神さまはそのことを望んでおられます。わたしたちが、そうして神さまの御許に立ち帰って、神さまの恵みに生きる者となることを、心から喜んで下さるのです。

ゼカリヤ書は、「あなたの王が来る」と告げました。そうです。あなたの王。あなたの主。イエスさまこそ、わたしの王、わたしの主なのです。

だれかの所有物であった子ろばが、本当はすべてを支配し、まことの王であるイエスさまのものであると告げられ、その方にこそ用いられるべき器であったように。わたしたちもまた、本当はだれに所有されるべき者か。本当はどなたがわたしの主であるか。そして、どなたに用いられるべきかを、知らされなければなりません。

わたしが、神さまのものであると知ること。イエスさまが、わたしの主であると知ること。しかもこの方は、わたしのために命を捨てて下さる主。わたしのために、十字架に架かることも厭わない、平和の王であると知ること。このことを受け入れることが、イエスさまを信じ、イエスさまに従う、ということなのです。

そして、この方のものとされ、この方に従って歩み始めた時。弱い、小さい、まだ荷物を運んだこともないような子ろばが、平和の王のしるしとなったように。わたしたちもまた、イエスさまが平和の王であることを証しする者、御業に用いられる者とされていきます。

今、わたしたちもまた、イエスさまを、わたしの王、まことの平和の王として迎え、賛美の声をあげたいのです。「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちにまことの王、あなたとの和解をもたらして下さる平和の王、イエスさまをお遣わし下さり、心から感謝いたします。

イエスさまは、神の御子でありながら、貧しく、小さく、低くなられ、ご自分のすべてを与えるために来て下さった、わたしたちに仕えて下さる、高ぶらない王であります。

この方を、わたしの主として、わたしの王として、受け入れ、迎える者とならせて下さい。

そして、イエスさまのご支配に生かされているわたしたちが、賛美の声をあげ、この方こそまことの王であることを世の人々に証しする群れとなる事が出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン